

欧州サッカーリーグにおけるユース出身選手の割合と戦力要員数

Proportion of Youth Academy Players and Youth Development Index in European Football League

スポーツビジネス研究領域

5015A033-7 藤井 暢之

研究指導教員：平田 竹男 教授

【背景】

サッカークラブには、ユースやアカデミーと呼ばれる若年層を対象にした選手育成機関が存在する。ユース選手育成が、クラブやリーグ、ひいては代表チームの躍進に繋がるとして、兼清（2011）はJリーグ所属クラブのユース選手育成の実態、三澤（2013）はドイツ・ブンデスリーガ所属クラブのユース選手育成の実態を経年比較によって明らかにしている。

上記2つの研究により、Jリーグ所属クラブ、ブンデスリーガ所属クラブのユース育成が向上している実態は明らかになった。しかし、それがどれくらい進んでいるのか、進んでいないのか等、向上度合いが他のサッカーリーグと比較してどの程度であるのかまでについては言及されていない。事実、三澤（2013）は1カ国の推移のみではなく、「他国リーグでの分析と比較を行うことで更なるユース育成の研究を進める必要があると言える」と述べている。

また兼清（2011）の研究対象であるJリーグは調査開始時期が発足から10年後の2002年であり、ユース育成の実態が発展途上であるリーグの現状を表したものであり、成熟期のリーグの実態を表したものではないと考えられる。

欧州のサッカーリーグは古いものでは100年以上前から発足しており、Jリーグに比べて歴史が深い。欧州のサッカーリーグがそれぞれユース育成の実態が異なるのか、また経年変化によって増加傾向、あるいは減少傾向の様な特徴が表れるのか、そして欧州のサッカーリーグのユース育成の実態を見ることでJリーグのユース育成の将来像を考慮する上で参考になるのではないのかという点が本研究のリサーチクエスションである。

【研究目的】

欧州サッカー5リーグの比較を行い、リーグ毎の特徴とユース育成の実態を明らかにする。

【研究手法】

1. 対象・期間

対象期間は2006/2007シーズンから2015/2016シーズンの10年間とした。研究対象は対象シーズン毎に、イングランド・プレミアリーグ所属20クラブ、スペイン・リーガエスパニョーラ所属20クラブ、イタリア・セリエA所属20クラブ、リーグアン所属20クラブ、ドイツ・ブンデスリーガ所属18クラブに限定する。

2. 対象データ

本研究において、選手の活躍状況を判断するための指標として兼清（2011）と同様、出場時間を用いる。選手の出場時間や経歴等のデータは、三澤（2013）においても用いられたWeltfussball.de等を利用して収集した。

まず、対象期間における対象選手の出場試合数ランキングを対象クラブ毎に作成する。次にYDIを算出する。YDIの算出方法は兼清（2011）、三澤（2013）と同様、出場時間上位11位の選手をレギュラークラス、出場時間上位12位から18位までの選手をサブメンバークラスとして、それぞれにユース選手が何名存在するか調査を行う。本研究においても兼清（2011）、三澤

（2013）に倣い、サブメンバークラスを含む出場時間上位18位の選手をクラブの戦力要因とする。その後レギュラークラス、サブメンバークラスに存在するユース選手数の合計値をYDIと定義し、クラブ毎にYDIを調査する。

そして、明らかになった全クラブのYDIを調査対象となったクラブ数で割って平均を出し、各リーグのYDIを抽出する。

3. 分析手法

（ア）分析対象

今回の調査において、クラブの強さによってユース育成の実態に違いや差があるのかという点も把握するために、全体で調査した場合と各シーズンの各リーグ戦の上位、下位の2に分けた場合、各シーズンの各リーグにおいてUEFAチャンピオンズリーグ（以下、CL）出場権を有するクラブを上位、UEFAヨーロッパリーグ（以下、EL）出場権を有するクラブを中位、上記2大会の出場権を有さないクラブを下位の3つに分けた場合でそれぞれ分析を行う。

表1 分析対象一覧

分析対象	概要	対象クラブ数
全体	対象全クラブ	980
上位	リーグ戦の順位が上位半分になるクラブ	495
下位	リーグ戦の順位が下位半分になるクラブ	495
CL出場権	CL出場権を持つクラブ	181
EL出場権	EL出場権を持つクラブ	105
その他クラブ	大陸選手権出場権を持たないクラブ	694

（イ）分析項目

分析対象別に各リーグの比較を行う項目は、ユース出身選手数の割合とYDIと各シーズンにおける各リーグの選手総数に占めるユース出身選手数の割合である。今回の調査ではチーム数、選手数に差のあるリーグの比較を行うため、各項目のデータは実数ではなく割合を用いた。

（ウ）分析手法

対象期間におけるリーグ毎のユース育成の違い、特徴を見るために、対象別に見たユース出身選手数の割合、YDIという項目のリーグ毎に平均値を出し、差異を調査した。その後、一元配置分散分析を行い、有意差が見られた場合にはTukey HSDを用いた多重比較を行い、対象・項目別のリーグ間の比較を行った。

次に、ユース出身選手数の割合、YDIの対象期間におけるリーグ毎のユース育成の経年変化の分析を行った。リーグ毎のユース育成の推移の分析には二元配置分散分析を用いた。

【研究結果】

1. リーグ毎

本研究によって、調査期間におけるユース出身選手選手数の割合、YDI はリーグ毎で違いがあると統計分析により明らかになり、それぞれの項目でリーグ毎の平均値を出した。

対象を全クラブとした場合、ユース出身選手数の割合が最も高いリーグは、リーグアンであり、順にリーガエスパニョーラ、ブンデスリーガ、プレミアリーグ、セリエ A であった。

YDI が最も高いリーグは、リーガエスパニョーラであり、順にリーグアン、ブンデスリーガ、プレミアリーグ、セリエ A であった。

2. 経年変化

ユース出身選手数の割合、YDI との対象期間におけるリーグ毎の経年変化を調査するために二元配置分散分析を用いた結果、それぞれの項目において対象期間とリーグに相互作用がないことが明らかになった。

【考察】

1. 欧州 5 リーグのユース育成の特徴

対象別に見た各項目のリーグ順位を以下の表にまとめた。

表 2 欧州 5 リーグのユース育成の特徴 (対象別)						
対象	全クラブ		上位クラブ		下位クラブ	
項目	割合	YDI	割合	YDI	割合	YDI
1 位	リーグ 1	リーガ	リーガ	リーガ	リーグ 1	リーガ
2 位	リーガ	リーグ 1	リーグ 1	リーグ 1	リーガ	リーグ 1
3 位	ブンデス	ブンデス	ブンデス	ブンデス	ブンデス	ブンデス
4 位	プレミア	プレミア	プレミア	プレミア	プレミア	プレミア
5 位	セリエ A	セリエ A	セリエ A	セリエ A	セリエ A	セリエ A
対象	CL 出場権クラブ		EL 出場権クラブ		その他クラブ	
項目	割合	YDI	割合	YDI	割合	YDI
1 位	リーガ	リーガ	リーグ 1	リーグ 1	リーグ 1	リーグ 1
2 位	リーグ 1	ブンデス	リーガ	リーガ	リーガ	リーガ
3 位	プレミア	リーグ 1	ブンデス	ブンデス	ブンデス	ブンデス
4 位	ブンデス	プレミア	プレミア	プレミア	プレミア	プレミア
5 位	セリエ A	セリエ A	セリエ A	セリエ A	セリエ A	セリエ A

2. リーグ毎のユース育成の特徴

ブンデスリーガはリーグ戦の上位に位置するクラブにおいてはユース出身選手数が少なく、リーグ戦の下位に位置するクラブにおいては戦力要因であるユース出身選手数が少ないことが考えられる。

リーガエスパニョーラにおいて、リーグ戦の上位に位置するクラブのユース出身選手数や、戦力要因に占めるユース出身選手数が 5 リーグ内で最も多いが、リーグ戦の下位に位置するクラブのユース出身選手や戦力要因に占めるユース出身選手数がリーグアンと比べて低く、その点がリーガエスパニョーラにおけるユース育成の課題だといえる。

リーグアンはリーグ戦の上位に位置するクラブにおいてユース出身選手数、戦力要因であるユース出身選手数が少ないことが示唆され、その点がユース育成の課題の 1 つと考えられる。

プレミアリーグは、リーグ戦の最上位に位置するクラブ以外のクラブにおいても、ユース出身選手数を増加させていくことと、全てのクラブにおいて戦力要因となるユース出身選手を増加させていくことがユース育成の課題として考えられる。

セリエ A は 5 リーグで唯一、対象別で見たユース出身選手数の割合と YDI の値が 5 リーグ平均を下回ったリーグであり、全ての値が 5 リーグ内で最も低かった。つまりセリエ A は上位クラブ、下位クラブに関係なく、ユース育成の水準が低いことが示唆され、リーグとしてユース育成が停滞していることが示唆された。

3. 経年変化によるリーグ毎のユース育成の特徴

調査期間における欧州 5 リーグに限定すれば、ユース出身選手数の割合や YDI のようなユース育成の項目はリーグ毎に特徴や違いがあるが、経年変化で見た時、リーグのユース育成水準は一定であるため、ある一定の時期を過ぎるとリーグのユース育成の水準が決定し、その水準を一定に推移することが示唆された。

4. J リーグのユース育成について

本研究によってリーグ毎のユース育成の特徴や違いがあることが分かった。兼清の研究によって明らかになった J リーグのユース育成の上昇傾向は J リーグにおけるユース育成の水準を決めるためのプロセスとして捉えることが出来る。また、今後 J リーグのユース育成の水準がどの程度になるかは不明だが、上昇傾向や下降傾向といった経年変化が見られず、一定のユース育成の水準を保つ可能性が示された。

【結論】

本研究によって、ユース出身選手数の割合と YDI がリーグ毎に異なることが明らかになった。ユース出身選手数の割合はリーグアンが最も多く、順にリーガエスパニョーラ、ブンデスリーガ、プレミアリーグ、セリエ A であった。YDI はリーガエスパニョーラが最も高く、順にリーグアン、ブンデスリーガ、プレミアリーグ、セリエ A であった。

統計分析より、リーグ毎のユース育成に違いがあることが明らかになった。リーグ毎の経年変化による違い、特徴を調査したが、リーグ毎のユース育成と時間経過に交互作用がないことが明らかになり、リーグ毎のユース育成の水準は一定であることが示された。